



Title	中島敦「弟子」論
Author(s)	廖, 秀娟
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2002, 36, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47952
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中島敦「弟子」論

廖 秀 娟

はじめに

「弟子」は「中央公論」の昭和十八年二月号に掲載された作品である。表題は草稿段階では「子路」であったが、清書段階では「師弟」に、そして更に「弟子」へと三度書き換えられた。従来の先行研究を概観すれば、幾つかの論点が浮かび上がってくる。最も多く言及されているのは本作品の主題の捉え方についてである。篠田一士氏は「ひとりの弟子がその「物」(筆者注・孔子)に同化し、屈服することを拒絶して、彼自身の生命を発見し、獲得する過程⁽¹⁾」という解釈を提示した。横林滉二氏と木村一信氏は「自己の「愚かさ」「性格的缺點」に殉じ⁽²⁾」「いかに悲劇的な結末が予想されようと、己にこだわら、己の性情、愚かさに殉ずる如く自己を押し進めた子路を描き出すことに、中島の真の意図があつた⁽³⁾」と子路の「愚かさ」を読みの中軸に据えているが、基本的には篠田氏と同じ問題意識を受け継いでいる。それは中島敦の初期作品「狼疾記」にある「俺は俺の愚かさに殉ずる外に途は無い」という視線から、最後まで己に拘った子路の意味付けを行うということである。

一方、「拒絶」「鬪争」⁽⁴⁾とは異なる視点から見るとある。作品の中核は「子路と孔子との二重唱」⁽⁵⁾、「師弟愛の緊密さ」⁽⁶⁾にあると子路一人についてだけではなく、孔子と子路の「師弟愛」に作品の主題があると越智良二氏、濱川勝彦氏が指摘している。ここで、中島が題名を変更したことを思い出してみよう。この作品の主題が子路の「愚かさ」にあるなら、作品の題名は「子路」でよかつたと思われる。また、主題が孔子と子路との「師弟愛」にあらなら、作品の題名は「師弟」でよかつたのではないか。しかし、中島は「弟子」に変更したのである。この題名に本作品の主題が託されていると考えられる。

周知のように、この作品は子路が孔子に入門してから、衛国内乱に巻き込まれ死ぬまでの半生を描いたものである。その歳月は四十年以上にも渡った。第二章で「此の精神的支柱から離れ得ない自分を感じ」、第八章で仕官するなら「孔子を上に乗くといつた風な特別な条件が絶対に必要である」と固く思った子路は、結局、師を離れ衛に仕官する。そして、当初形式主義を強く批判した彼は死ぬ際に「冠を、正」した。つまり、今まで忌避してきた儒教の礼に則って死を迎えた。そこに、この作品の一つの特徴が指摘出来る。それは、子路の所信は必ずしも不変のものではないということである。そのような子路の成長や変化について、今までの先行研究では子路の「愚かさ」に気を取られすぎて、看過されてきた。本稿では、子路の成長に着目し、孔子の造型、及び最後に子路が「君子」に辿り着いた境地について考え、本作品の主題を捉え直してみたいと思う。

一、子路の目覚め

作品の前半では、子路が孔子に入門する以前、既に有していた固有の倫理感が中心に描かれる一方、彼の孔子へ

の敬愛の情の描写にも重点が置かれ、「死に至る迄渝らなかつた・極端に求むる所の無い・純粹な敬愛の情だけが、此の男を師の傍に引留めたのである」と子路の孔子への厚い敬愛の情が描かれている。その一方で、師の幸福を第一に考える子路は、単純な価値観を持って世の中を眺め、無念にも「邪が榮えて正が虐げられる」時代の厳しさとぶつからざるをえない。「善と悪との間にも差別を立てないのか」と子路は天にその不満を訴えた。彼が最も不満に思うのは孔子の不運である。「天下蒼生」のために奔走する孔子に酬いようとしないう天であるなら、彼はその天にまで反抗するのである。「濁世のあらゆる侵害から斯の人を守る楯となる」という言葉の裏に、人生のすべてを投げ出しても世俗の悪意から孔子を守ることを自らの使命と自認する子路の姿があらわれている。

本作品の第六章で、齊の宰相は孔子の存在に懼れを抱き、反孔子派と手を繋ぎ、定公と孔子の間を離そうと策動した。魯候と大官連の淫らな行為を見ていられない子路は真先に憤慨して官を辞した。そして、懸命に師を世間の乱れから隔離しようとした彼は、「孔子に早く辭めて貰ひ度くて仕方が無い」が、孔子はなお尽くせる所まで尽くそうと考えている。孔子を守ることを第一に考える子路には恐らく、孔子は何のために粘るのか、なぜ尽くせる所まで尽くそうとするのか、その理由については理解できないであろう。孔子が魯国を去ることに對して、「はつと」して、「欣ん」だ子路には、魯国を出ざるを得ないことが孔子にとって如何に痛みを伴うのかは判らないのである。

この師弟の間にあるすれ違いは第八章の冒頭部にも見ることが出来る。「ここに美玉あり。匱に韞めて藏さんか。善賈を求めて沽らんか」という子貢の質問に對して、孔子は即座に、「之を沽らん哉。之を沽らん哉。我は賈を待つものなり」と答える場面が描かれている。この子貢の質問について子路は孔子や他の弟子と違う考えを持ってい

權力の地位に在つて所信を斷行する快きは既に先頃の經驗で知つてはゐるが、それには孔子を上戴くといつた風な特別な條件が絶対に必要である。それが出来ないなら、寧ろ、「褐（粗衣）を被て玉を懐く」といふ生き方が好ましい。

生涯孔子の番犬に終らうとも、些かの悔も無い。世俗的な虚榮心が無い譯ではないが、なまじひの仕官は却つて己の本領たる磊落濶達を害するものだと思つてゐる。（八）（傍線は筆者による。以下全て同様）

子路にとつて出仕というのはあくまでも孔子への奉仕の延長線上にある。仮に孔子への奉仕という前提を別にすれば、子路自身にとつては、むしろ「褐を被て玉を懐く」という生き方が好ましいのである。そのような生き方を志向する彼は、孔子及び他の弟子たちが仕官しようとする行為を「世俗的な虚榮心」と理解しているのである。

第九章で衛の夫人南子に迫られ、やむをえず挨拶に出る孔子に子路は不愉快な表情を見せた。「絶対清浄である」
苦の夫子が汚ららしい淫女に頭を下げたといふだけで既に面白くない」と思う彼は、孔子が南子風情の要求などは黙殺することを望んでいた。しかし、挨拶に出た孔子には、理想や使命があるからこそ、その使命を実現するために現実と妥協することも仕方がないという、柔軟な処世態度が見出せる。「現實主義者、日常生活中心主義者たる」孔子は、その使命のため、世俗を認識し、必ずしも「絶対清浄である」必要はないのである。

ここまで来ると、我々は一つの事実と直面せざるをえない。それは、いくら子路が孔子を敬愛しているとはいへ、彼が自らの頭に描いた孔子像と実在する孔子との間には「ズレ」があるということである。孔子に対して愛情を持つていても自らの理念を持たない子路にとつては、理想を實現させるために孔子の見た処世態度は理解できないものである。弟子への愛情を持つていても、遠い未来に視線を注いでいる孔子は子路の望みに応えることができない。

いのである。しかし、このような「ズレ」は必ずしも不変のものではないのである。第十一章で、子路が一人孔子の一行に遅れて歩いていく途中に隠者と出会い、彼は初めて「他者」⁽⁷⁾に対して孔子を語ることになった。

「楽しみ全くと始めて志を得たといへる。志を得るとは軒冕の謂ではない」とその隠者は孔子の行動を「軒冕の謂」と理解していると考えられる。この点は孔子らの行動を「世俗的な虚榮心」と理解した子路と共通している。隠者の「澹然無極」の生活を「之も又一つの美しき生き方には違ひない」と子路はその生活に共鳴を感じた。「褐を被て玉を懐く」という生き方を志向している子路の根源に、「澹然無極」を理想とする隠者と共通する部分があるために、彼が隠者の生活に憧れを感じても無理はない。しかし、羨望を感じたにもかかわらず、彼は隠者が孔子の行動を誤解することを許せないのである。

今まで彼にとって最も大事なものは孔子という存在である。彼が孔子と共に放浪の艱苦を味わう理由は孔子への敬愛の情であって、この旅の目的が何であるかは、彼にとっては重要なことではなかった。しかし、老人に孔子の理想を語る事によって、彼は初めて孔子を自らが描いた枠から外し、新たな視点を獲得し孔子の理想を考え始めたのであろう。老人の隠者生活に羨望を感じた子路がその老人の行動に「憎惡」を覚え始めたことは、子路が昔の子路と別れを告げることを意味しているといえる。

本作品の第十二章で、工伊商陽について子路と孔子との間に問答があった。工伊商陽は呉国を討つ際に、一人を射るごとに目を覆って、三人を殺した後に戦地から車を返した。その工伊商陽の行動に対して、孔子は「人を殺すの中、又禮あり」と感心したが、子路は納得できなかった。「人臣の節、君の大事に當りては、唯力の及ぶ所を盡くし、死して而して後に已む。夫子何ぞ彼を善しとする？」と彼は孔子に反論した。

この場面はこの作品で孔子が初めて、そして唯一「一言も無い」場面である。この場面が意味しているのは、子路と孔子が初めて同じ次元で、食い違いが無い状態で話をしたということである。今まで、孔子の行動の真意を理解できない子路は孔子の行動に対してただ「不愉快な顔」をし、自らの不満を表した。しかし、この十二章の子路は孔子の教えに則って、孔子と同じ位置で物事を論じていたといえよう。この子路の成長は後に「積極的な命なり」という言葉によって更に確認される。

子路は「一小國に限定されない・一時代に限られない・天下萬代の木鐸」としての使命に目覚め、彼の視線は、孔子から離れて、世俗に移っていた。より広い意味で言えば、後世に移っていたといえる。第七章で、「孔子が嘆じたのは天下蒼生の為だったが、子路の泣いたのは天下の為ではなく、孔子一人の為である」という描写がある。かつての子路にとっては「天下蒼生」というのはあくまでも孔子の理想に留まり、彼自身には何の意味も持たない。しかし、自らの運命に目覚めた子路の視線は孔子から離れ、自ら「天下蒼生」を考え始めた。それは子路の成長が孔子に近付きつつあるのを意味する反面、子路が双方の「天下蒼生」に対する認識の違いを意識し始めたことをも意味する。第十四章に、師に再拝して謝し、「欣然として任に赴いた」子路は、単純に師の教え、理想を理解するだけの弟子ではなくなる。師の教えを背負って、自分なりの理解で実践していく弟子になったのである。

二、聖者の孤独

この作品の最後で「老聖人は佇立瞑目すること暫し、やがて澹然として涙下った」とあるように、作者は孔子を「老聖人」と称した。この孔子の存在を「その行動の荒々しい粗野な青年の内面を照らし出す鏡の働きを、作者は、

孔子に付与している」⁽⁸⁾と濱川氏が指摘し、孔子は子路が持っている様々な可能性を見出した人物と位置づけた。そのような孔子を子路は「大丈夫な人」「大才、大徳」の人物として評価した。子路の眼には、孔子は完全に近い偉大なる聖人として映っている。そのような孔子の存在について、木村氏は「子路にとっては「規範」とも考えられるもの」⁽⁹⁾と指摘した。

にもかかわらず、この「聖人」、「規範」と造型されているはずの孔子像と齟齬する描写が数カ所に見出される。作品中、子路の描写はほとんど孔子の目を通したものに限定されているのに対して、孔子の描写には子路に限らず、他の登場人物や弟子達の視線も導入され、より複眼的である。そこに作者の意図があると考えられる。単に「聖人」である孔子を描こうとするならば、他の人物の視点を導入する必要はない。様々な登場人物の視点を取り入れることによって孔子の持つ様々な側面が描かれているのである。

まず「此の丈の高いぶつきらば、ほうな爺さんを、靈公が無闇に賢者として尊敬するのが、南子には面白くない」と南子の心理を叙述し、孔子の俗人の一面を語らせていることが挙げられる。そして、「孔子は欣んで服を改め」、「孔子も流石に不愉快になり」、「冷やかに公の様子を窺ふ」、「寂しげな孔子」と、孔子の持つ喜怒哀楽の側面が語られる。それは、今まで冷静さを保ち心の動きを簡単に見せなかった孔子とは違うものである。ただ、これらの視点は南子のような儒教外部の人間の見方であるため、表面的な批判になりがちである。一方、「絶対に人に信頼を起させる夫子の辯舌の中の・僅か百分の一が、時に、夫子の性格の（其の性格の中の・絶対普遍的な真理と必ずしも一致しない極少部分の）辯明に用ひられる惧れがある」と孔門の一人である子貢の言葉によって、孔子にある巧弁の一面が語られる。

ここで、子貢の果す役割を考えてみよう。子貢に孔子のこの一面を語らせる作者の意図は、後の子路の孔子批判への布石だと考えられる。子貢を経ずに、直接、子路によって孔子の「明哲保身」の一面を語らせたなら、その内容の客観性が疑われる。同じ弟子であるが、第三者として客観的な立場に立つ子貢の視点を導入することによって、「明哲保身を最上智と考へる傾向が、時々師の言説の中に感じられる」という子路の考え方がスムーズに受け入れられると考えられる。

しかし、ここで孔子を悪く捉えようと、子路が孔子から受け継いだ「超時代的な使命」は何の意味も持たなくなる恐れがある。そもそも、この第八章は「弟子」において異質な存在である。作品全編は子路或いは子路と孔子の関係を中心に語るのに対して、第八章だけは子貢または、子貢と孔子のエピソードが中心に語られる。前半において孔子の「警戒すべき點」を語らせるところは、先程述べたように子路への布石と考えられるが、後半に子貢の奇妙な質問をめぐる子貢と孔子の問答を設定する意図は不明である。言い換えれば、子路と孔子の物語の中に、この子貢を中心人物とするエピソードをどのように位置づけなければならないかが問われる。

「死者は知ることありや？ 將た知ることなきや？」という子貢の質問に対して、その質問の意味を理解しているにもかかわらず、孔子は「凡そ見當違ひの返辭」をした。この孔子の答えを子貢は甚だ「不服」、「不満」と思っていたのである。「此の優れた弟子の關心の方向を換へよう」という孔子の苦心を理解できない子貢の目には、満足できる答えが得られない師の言動は「辯が巧過ぎる」としか見えていない。ここでは、子貢の視点の限界、狭さが露呈され、彼の孔子への理解の正しさに疑いが生じる。この限界のある視点を持つ子貢は作者によって仕掛けられた反転装置だと考えられる。視点の限界の露呈によって、子貢自身の孔子認識が反転されるだけでなく、子路の認

識した孔子像の反転につながると考えられる。子路には「没利害性」が働くことにより、孔子のある側面が「明哲保身」と感じられる。ここでは一見子路と子貢の孔子像が崩れたように見えるが、あくまでも両者のフィルターを通しての孔子像であることに注意せねばならない。作者は第八章の前半で子貢の言葉を用い子路の訴えに真实性を持たせる一方、後半で子貢の視点の限界を浮き彫りにすることによって、子貢と子路によって照射された孔子の非聖人像を反転させるのである。

さて、孔子を基本的に「聖人」として描きながら、その非聖人的一面を描く必要性について考えてみる。

子路の此の傾向（筆者注・没利害性）は、孔子以外の誰からも徳としては認められない。むしろ一種の不可解な愚かさとして映るに過ぎないのである。しかし、子路の勇も政治的才幹も、此の珍しい愚かさには比べれば、ものの數でないことを、孔子だけは良く知つてゐた。（二）

このように、子路の「没利害性」を孔子は無類の美点と見做し、子路の生き方に一種の美を感じた。子路に美を見出した孔子の心情は、隠者の生活を一つの美しさとして羨望した子路の心情と同質のものである。子路の中に隠者と共通するものがあると同時に、孔子の中にも、子路と共鳴するものがあるといえる。しかし、子路が隠者のような生き方を断念したのと同じように、いくら共鳴する部分を持っていても、「中庸への本能」の持ち主である孔子には子路のような生き方は出来ない。自分の出来ない生き方で勇敢に生きていこうとする子路の姿を前にして、聖者・孔子にある種の〈限界〉あるいは〈淋しさ〉が漂っているのではないか。孔子を「聖人」に造型する一方、その非聖人の一面が描かれるのは、孔子は「聖人」でありながらも、その「聖人」に似つかわしくない〈淋しさ〉を有していることを暗示しているのである。

三、〈弟子〉としての死

第十六章で、子路は死ぬ際に「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」と叫んだ。子路の死は早く「恐らく、尋常な死に方はしないであらう」と孔子の言葉によって予告されていた。しかし、彼が自らを君子と名乗る行動には少しの兆しもなかったのである。臨終の時に自らのことを君子と叫んだことは、彼の死についての解釈において大きな意味を持つていると考えられる。以下は君子に視点を置き、考察を進める。

この作品の第三章に子路が孔子を貶した者を腕力で倒そうとした場面がある。その子路の行動に対して孔子は次のように言い聞かせた。

古の君子は忠を以て質となし仁を以て衛となした。不善ある時は則ち忠を以て之を化し、侵暴ある時は則ち仁を以て之を固うした。腕力の必要を見ぬ所以である。兎角小人は不遜を以て勇と見做し勝ちだが、君子の勇とは義を立つることの謂である云々。神妙に子路は聞いてゐた。(三)

後に、「所謂君子なるものが俺と同じ強さの忿怒を感じて尚且つそれを抑へ得るのだつたら、そりゃ偉い」という彼の言葉から考えれば、彼は孔子の描いた「君子なるもの」の〈基準〉に基づいて自らを「君子なるもの」と区別したことは明らかである。それは孔子を貶す者を拳で倒すことをやめられない自分の行動が、「君子」の〈基準〉にはみ出すと認識したためである。作品の結末に「君子は」と叫んだことは自らの行動がその〈基準〉に叶ったという子路の心理を物語っている。彼の心理を明らかにするために、事件当日の場面を検討することが有効な手掛かりとなる。

「自分の直接の主人に當る」、「孔家の禄を喰む身ではないか。何の為に難を避ける？」など、事件当日の子路の言葉を考えてみれば、「人臣の節、君の大事に當りては、唯力の及ぶ所を盡くし、死して而して後に已む」という信念が彼の行動を支えている。かつて「今、丘、仁義の道を抱き亂世の患に遭ふ。何ぞ窮すとなさんや」と、孔子は君子の処世精神を子路に語ったことがあった。その精神に依拠し、子路は早くから「政變の機運の濃く漂つてゐる」ことを察しているにもかかわらず、その難を自らの「命なり」と理解し、その運命を避けようとしないのである。「憤慨して衝突し、官を辭」する子路像は既に遠い昔の話になつていゝといえよう。

「正義派は亡びはせぬぞ！」という言葉から彼は自らの行動が正義の伴うものと認識したと考えられる。その正義ゆえに、彼は自らの行動が孔子の語った「君子の勇とは義を立つること」という「基準」に叶うもの、すなわち「君子」にあたると考え、「君子たる」死に方で死ぬべきだと自らに課した。それこそが、形を軽蔑しつづけてきた子路が、何の躊躇いもなく冠を正して死んだ理由なのである。「形式主義への本能的忌避」によって、子路はすべての形を軽蔑しているかのように思われがちである。しかし、子路が形式を不満に思うのは精神、行動の伴わない場合である。つまり、行動に伴つて初めて形が意味を持つと子路は考へている。

死ぬ直前に「見よ！」と叫んだ子路が明らかに「誰か」を意識して行動したことは早くに藤村猛氏に指摘された。⁽⁹⁾まず氏が述べたように、自らの使命に目覚めた子路は、孔子と同様に後世の人を意識していると考えられる。勿論、事件の現場に集められた群臣を意識し、臣下としての節を全うした自分の姿をみせることによつて、当時の氣風に影響を与えたかつたとも考えられる。しかし、子路にとつて自分の死に様を最も見せたい人物は政變の現場から離れている孔子であらう。

第十五章、斉の陳恒がその君を弑したことに對して、孔子は義のために斉を伐つことを魯の哀公に請うたが、斉の強さを恐れた哀公はこれに賛成しない。「無駄とは知りつつも一應は言はねばならぬ己の地位だ」という孔子の姿勢に子路は「夫子のした事は、ただ形を完うする為に過ぎなかつたのか」と不満を感じた。しかし、魯候を動かして斉を伐つのは不可能である。この事実を知り尽くし、無駄と知りつつも、国老として「言はねばならぬ」のは「中庸」の人間孔子としての最大の努力、又は、限界ともいえる。しかし、そのような孔子の行動は、無駄とは知りつつも「諫死」までする子路の眼には単に形に留まって、実行に移さないとしかみえない。

子路が死を以て孔子にみせたいのは、「結局此の世で最も大切なことは、一身の安全を計ることに在るのか？」いや、この世の中で最も大切なことは、「身を捨てて義を成すこと」にある、個人の「出處進退の適不適」より、「天下蒼生の安危」が大切だという彼の答である。

そして、衛の政変を聞いて「卽座」に、孔子は空間を越えて子路の叫びを聞いたかのように「柴（子羔）や其れ歸らん。由や死なん」と言った。子路の行動について孔子は何のコメントもしなかった。子路にとっては自分が君子と成った一面であり、その成長した自分を師に見せるのは「弟子」としてすべてをかけても成したい願望である。全身の力を絞って叫んだ子路は自らの行動が君子にあたり、いささかの逡巡もなく固く信じている。しかし、いくら子路が固く信じたとしても「急いで死ぬるばかりが能ではない」という孔子の言葉を前にすると、子路の君子としての死には暗い影が差してくる。孔子からみた子路は果して君子なのかどうかという疑問は、これまでも絶えず論じられてきた。子路にとって自分が君子であるかどうかは命より大事な問題であるが、果して孔子にとってこの問題はそれほど大きな意味を持つのであろうか。子路の「愚かき」の美を「孔子だけは良く知つてゐ」て、誰よ

りも評価する理由は、彼等に共通しあうものが存在するからである。それゆえに、子路の生き方は他の人にどのよう「愚か」と思われても、同じ「愚かさ」を共有する孔子の涙によってその美が保証されたといえる。

おわりに

「師の智慧の大ききも判」り、師の「舉措の意味も」領け、「孔子といふものの大きな意味をつかみ得たやうである」にもかかわらず、子路は己の「愚かさ」に殉じたという読みは従来の「弟子」論に共通する見方である。

しかし、本稿で強調したいのは、子路と孔子の関係はそのへにもかかわらずにあるのではなく、むしろ、「孔子といふものの大きな意味をつかみ得たやう」になったへからこそにある。魯国の紛乱に「官を辭」した子路は、「天下蒼生」は念頭にないと考えられる。ここに一身の潔さを全うする子路像が窺える。その子路なら、衛の内乱に巻き込まれないはずである。一步進んで言えば、彼は生涯孔子の「番犬」として孔子から離れないはずである。しかし、子路は自らの運命に目覚めた。そして、そのきっかけはやはり子路の孔子への敬愛によったのである。その敬愛によって彼は「天下蒼生」に眼を向け、孔子の保護から出て世俗に歩き出し、とりわけ、時代の悪意に向かった。そこに、師から啓蒙された時代への使命感によって、子路は一人のへ弟子としてその所与された運命を必然と考え、更にその必然を自由と見なしたのである。言い換えれば、子路は師の「超時代的な使命」に目覚めたからこそ、その「一旦事ある場合真先に夫子の為に」抛とうとする生命を「天下蒼生」のために変更したのである。

最後に本作品の題名「弟子」について考えてみたい。この作品のテーマは子路の「愚かさ」にはない。また、「師弟愛」にも限つてはいない。テーマはその「弟子」にある。「師」と「弟」は「蒼生」を思う心は同じであるが、

師は「中庸」としての表現方法で表現し、弟子は弟子としての表現方法で表現し、その形は異なるが、その精神は繋がっている。弟子というのは師の教えを受けることに留まらず、師から離れ、その受けた教えを実践に移すのも弟子としての務めであろう。孔子から受け継いだ使命を基軸として、子路は世俗へ、自分の運命へと向かって歩み出した。この子路の姿こそが「弟子」の主題であろう。

註

- (1) 篠田一士「弟子」をめぐって『中島敦研究』筑摩書房、一九七八・一二
- (2) 榎林滉二「弟子」の構想『現代文シリーズ13「中島敦」』尚学図書、一九八三・五
- (3) 木村一信「弟子」論—己が性情への指向—『中島敦論』双文社、一九八六・二
- (4) 宮田一生「中島敦『弟子』論」『日本文藝研究』第四十八巻第四号、一九九七・三「子路は孔子との調和と不調和の激しい闘争を演じつつ、自己を発見していくのである。これが中島が『弟子』において、試みたドラマであった」。
- (5) 越智良二「弟子」の基軸『国文学攷』第六十八号、一九七五・八
- (6) 濱川勝彦「弟子」『中島敦の作品研究』明治書院、一九七六・九
- (7) 第三章と第九章で子路が孔子を貶す人々や南子に「拳」をあげる場面が多く描かれているが、彼が孔子を語る場面はこの一カ所のみである。ここで子路は初めて「門人以外」の人物、しかも儒教的な価値観を持たない人物に孔子を語った。その意味で老人を「他者」として捉える。

(8) 注(6)に同じ。

(9) 注(3)に同じ。

(10) 藤村猛「中島敦『弟子』論」『安田女子大学紀要』第二十一号、一九九三・一〇

※「弟子」の本文は『中島敦全集1』（筑摩書房二〇〇一・一〇）に拠った。傍点は凡て作者に拠る。

本稿は、二〇〇一年度阪神近代文学会冬季大会（十二月八日、於関西学院大学）で発表した内容に基づき、加筆・訂正を施したものである。会場の内外で貴重な助言をいただいたことを記して深い感謝の念を表したい。

（大学院後期課程学生）

A Study of Nakajima Atsushi's "*Deshi*"

L IAO, Hsiu-Chuan

The short story "*Deshi*" (*The Disciple*) was published in the February 1943 edition of the magazine *Chuokoron*. As can be seen in the original draft, the work's original title was "*Shiro*" (*the name of the protagonist*). However, as the author reworked the text, he changed the title to "*Shitei*" (*Master and Disciple*) and then finally to "*Deshi*". Previous scholarship on the Nakajima's short story has focused on delineating the influence of the Confucian classics on the text, examinations of the process by which the text was created, and formalist and structuralist analyses of the text. Moreover, there has also been some scholarly interest in the relationship between the changes in title and the story of the downfall and death of Shiro, the hero of the short story. This paper will attempt to shed new light on the text by focusing on the maturation of the main character.

キーワード：中島敦 弟子 ずれ 君子